

梅と牛：その背後にある伝説を持つ象徴

防府天満宮の御祭神である天神さまとなった菅原道真公（845～903 年）といえば、2 つの重要な象徴である梅と牛が連想されます。平安時代（794～1185 年）の貴族で審美眼をもつ道真公は、大の花の愛好家で、特に梅の花が好きでした。その梅の花にまつわる伝説が伝わっています。道真公は九州に左遷されることになり、京都の屋敷に立ち寄り、庭の梅の木に別れを告げたそうです。そして、道真公が九州に到着した時、彼がかわいがっていた桜と梅と松の 3 種類の木が空を飛んで、道真公の後を追いかけてきました。桜は寂しく枯れてしまいました。松は追いかけてきましたが途中で力尽きました。しかし梅の木だけがたどり着き、咲き誇り、左遷された道真公の心を慰めました。このようにして、梅の花は天神さまの象徴となり、日本の多くの天満宮の神紋となっています。防府天満宮の敷地に約 1,100 本の梅があるのもこのためです。

神道では、すべての神に自ら指名した動物の使者がいます。道真公の場合、その動物が牛です。そしてその理由を示す逸話が残されています。道真公は 903 年、左遷された九州の太宰府で亡くなりました。不名誉な死であるにもかかわらず、その地位の高さ故に、道真公のために盛大な葬儀が執り行われ、牛車でご遺体が運ばれました。しかし、埋葬地に向かう途中、牛車を引っ張っている牛が座り込み動かなくなってしまいました。これは、道真公がその牛が動かなくなった場所に埋葬されることを望んでいると、解釈されました。それ以来、座り込んでいる牛（臥牛）は、神格化された道真公である天神の象徴のひとつとなり、座り込んだ牛の下には天神様がおられると信じられています。防府天満宮には臥牛の像が三体あります。